

アジアゾウにおける鼻による餌把握の発達に関する観察研究

氏名 舟根遥希

指導教員 瀧本彩加

物体把握は、多くの動物種において、移動や繁殖・採食といった多様な文脈で観察される行動である。したがって、物体把握は動物が当該の環境下で暮らすために重要な役割を果たしている。この物体把握の能力は、実は、効率の良い採食行動を目指す上で進化してきた可能性が高いとされている。適切な物体把握を選択できることも、採食効率を高めるという点において進化的に重要であっただろう。物体把握に適した手を持たずとも物体把握が可能な種は数多く存在しており、その代表的な動物としてゾウ (*Elephantidae*) が挙げられる。ゾウは、その巨体を維持するために大量に採食する必要があり、高度な物体把握が可能な鼻は、生存するために非常に重要な役割を担っている。しかし、物体把握の研究対象はこれまで霊長類に偏ってきたため、霊長類以外の物体把握は分かっていないことが多い上、ゾウの鼻の使い方の発達については1個体の発達を追った縦断的研究がまだない。以上のことから、ゾウの採食場面における物体把握に関する研究は、学術的な意義が高いと考える。そこで本研究では、飼育下におけるアジアゾウ (*Elephas maximus*) の仔の採食場面において、生後12週齢から96週齢にかけて行動観察を行い、アジアゾウの仔における鼻による餌把握の発達を検討した。その結果、餌に鼻で触れてから口に入れるまでの時間は、週齢に伴い、短くなった。餌を一度も落とさずに口に入れることができる採食成功率は、週齢・餌の種類によらず、最初から高く推移した。餌の種類に合った鼻による餌把握ができる正解率は、切り餌については最初から高く推移したのに対し、干し草については、週齢に伴い、徐々に上昇する傾向を示した。したがって、飼育下のアジアゾウにおける鼻による餌把握は、採食を本格的に行う時期にはすでに採食に支障のない程度には発達しているものの、採食を本格的に行うようになる生後12週以降、採食の効率が徐々に高まるよう、さらなる発達が見られるということが示唆された。ただし、今回観察したのは仔ゾウ1頭のみで、このような発達は対象個体特有のものである可能性もあり、アジアゾウに共通する餌把握の発達とは言い切れない。そのため、サンプルサイズを増やして、同様の検討を進めることで、本研究の結果の妥当性を確認することが重要だろう。